

第2章

研究の実際

第1節

「思考力、判断力、表現力」
の育成に関する課題の整理

今期研究を進めていくにあたって、まず、本校の「思考力、判断力、表現力」の育成に関する状況を把握し、課題を整理するところから取りかかることとした。課題の整理は、令和3年度に作成した単元計画の「単元の個人目標の評価」のうち、「思考・判断・表現」の評価を分析する方法で行うこととした。

本校では、令和3年度からカリキュラム・マネジメントに係る業務の一環として、実施している単元のほとんどについて単元計画を作成し(表1)、紙媒体のファイルだけでなく、学校サーバー上のデータとしても保存している。個人の単元目標は、評価の際に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学び取り組む態度」の3観点を記述しているが、個人目標の評価のうち、「思考・判断・表現」の評価を記述することが難しいという声が多く出ていた。このことについて、実際に記述された評価を確認して、「適切に評価されているか」「どのように難しいのか」「なぜ難しいのか」について検討し、本校における「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題を分析する必要があると考えた。

〔表1 単元計画の記載項目〕

	単元計画記載項目
1	単元名
2	単元の目標(各教科等を合わせた指導も教科別に設定する)
3	単元の計画(各次の日程・時数・活動内容・指導内容)
4	単元の個人目標と評価 (個人目標は、教科別に児童生徒の段階に応じて個別に設定し、評価は3観点を記述式とする。また、今後に向けての気付きも記載する)
5	単元についての気付き等 (単元の目標を達成するにあたって適切な単元や学習内容であったかなど、単元全体の評価を行う。また、より個人目標が達成されるように改善すべき点などを記載する)

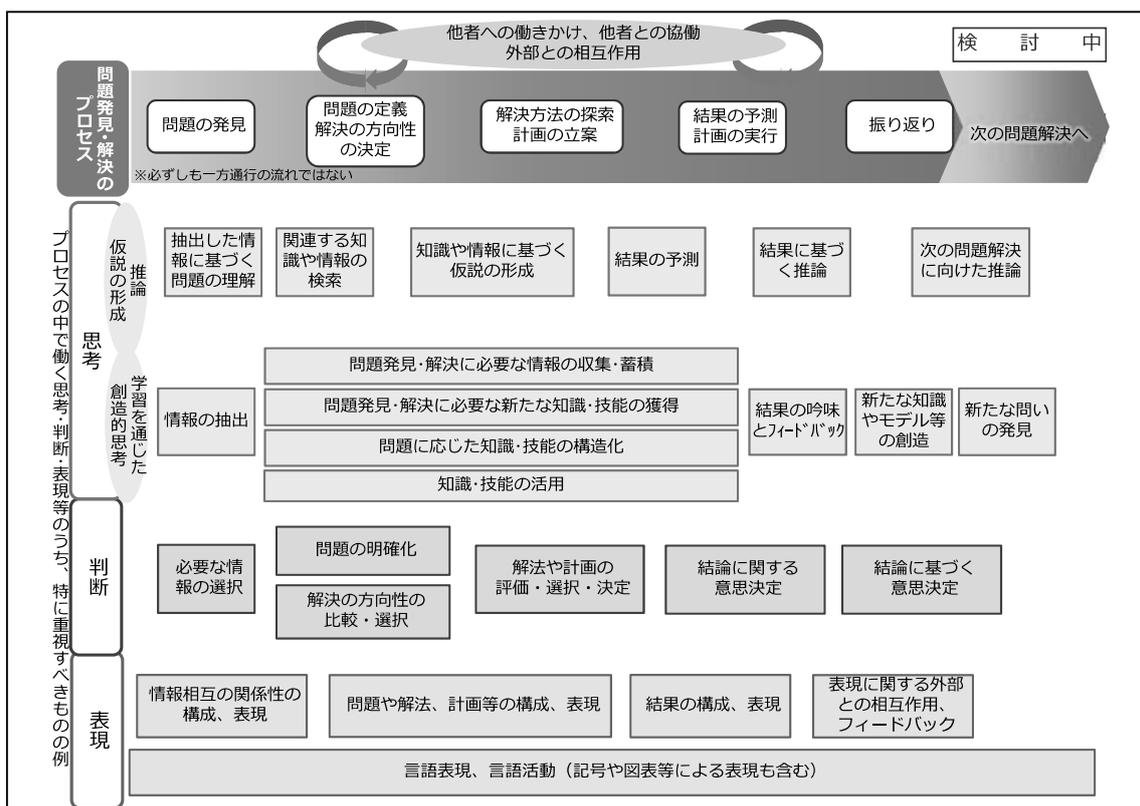
1 令和3年度単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分析する。

単元計画の評価の分析については、いくつかの項目に評価を分類した上で割合などの傾向を読み取り、その背景等を職員間で検討する方法で行うこととした。

分類の項目を設定するには、「思考力、判断力、表現力」の捉えを整理する必要がある。そこで、まず法的根拠等を確認しながら、「思考力、判断力、表現力」とはどのような力であるかを協議した。学校教育法第30条2項には「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と表記されている。また、学習指導要領(特別支援学校小学部・中学部学習指導要領)には、第1章総則第2節中に、「(1)基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに(後略)」の

記述がある。これらには、「思考力、判断力、表現力」とは「習得した知識及び技能を活用して課題を解決するために必要となる力」と示されている。この『知識及び技能』を活用して課題を解決するために必要な力』の文中の、特に「課題を解決する」をキーワードとしながら、検討を進めていった。

学習指導要領解説（総則編）では、「知識及び技能を活用して課題を解決する」過程を「事物の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程」「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」と示している。また、平成 29 年の学習指導要領改訂につながる、平成 28 年中央教育審議会での言語能力の向上に関する特別チームでは、審議資料として『思考力・判断力・表現力等』についての整理のイメージ』が提示された。その中で「問題発見・解決のプロセス」の中で働く「思考・判断・表現」（図 1）が示された。



〔図 1 「問題発見・解決のプロセス」の中で働く「思考・判断・表現」〕

この「課題解決のプロセス」で働く「思考力」「判断力」「表現力」を、本校単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分類する項目として設定し、評価分析シートを作成することとした。

なお、特別支援教育においては、いわゆる「発問」から始まり「問いへの回答」をゴールとする学習スタイルだけではなく、「生活上の課題に対してその解決に向けて取り組む」や「興味・関

心を軸に取り組みたいテーマを見出し、活動を積み重ねる」という学習スタイルを取ることも多いため、ここでは「課題」を「取り組むべきテーマや主題」の意味ももたせ、「問題発見・解決のプロセス」ではなく「課題解決のプロセス」と表現した。

「課題解決のプロセス」は授業の展開とも関連させて、「課題の発見」「解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行」「結果の受け止めと振り返り」と設定した。それぞれのプロセス中の「思考力」「判断力」「表現力」とはどのような力であるかについて、単元や授業における具体的な力を明らかにする必要があると考えた。まず、「判断力」や「表現力」の土台となる「思考力」について、先行研究から学ぶこととした。

栃木県総合教育センターの論考においては、「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究」(2016年3月)において、「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」の4つの「思考のすべ」を提唱している(図2)。普段の授業の中で児童生徒が「思考のすべ」を使うような発問等を行い、「思考力」を効果的に高める授業研究が行われた。

比較	ある視点に従って、複数の事象(情報)の共通点や相違点を明らかにすること
分類	ある視点に従って、複数の事象(情報)をグループ分けすること
関係付け	既習事項や経験と事象(情報)、または二つの事象(情報)どうしを結び付け、意味付けること
理由付け	考えや意見の根拠を明示すること

〔図2 栃木県総合教育センター「思考のすべ」〕

国立教育政策研究所の「教育課程の編成に関する基礎的研究」報告書「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本」(2013年3月)の中で取り挙げられた新潟大学教育学部附属新潟小学校の研究では、思考の具体的な働きが「比較する」「拡張する」等の「思考の方法」として動詞で示された。さらに児童が「思考の方法」を使用しやすいように、「○○と△△を比較してその違いから～がわかる」「他にもっとよいやり方はないかな」等の「思考のことば」も示された。授業の中で、児童が様々な思考の言葉を用いながら、様々な思考の方法によって問題の解決に取り組むことができるような、授業の在り方について実践研究が進められた(表2)。

〔表2 思考の方法とことば〕

思考の方法	思考のことば
○仮定する	「もし～ならば、～となる」
○推量する	「～は、○○になっている。だから、～は△△なのではないか」
○比較する	「○○と△△を比較して、その違いから～がわかる」
○視点（立場）、あるいは観点を 変える	「もし～の観点（視点・角度・理論・立場）から見たら、どうなるだろうか」
○共通の基準で見る	「～にあてはめると～になる」
○関係付ける	「○○と△△がどのように関係しているのか」 「～の原因として、どんなことが考えられるだろうか」
○帰納的に見る	「A, B, C から、～のきまりがいえる」
○類推する	「～でうまくいったので、～でも、うまくいくであろう」
○演繹的に見る	「～のきまりから D が説明できる」
○拡張する	「他にもっとよいやり方はないかな」 「では、～の場合はどうなるだろうか」
○焦点化する	「まずできるだけたくさん可能なものを挙げて、その中から、一番よいものを選んでみよう」
○逆発想する	「もし～でなく、その逆（反対）であったらどうなるだろうか」
○再分類・再編成する	「他の基準で分類したらどうなるだろうか」 「構成要素は何であるか、もう一度見直してみよう」
○加減する	「～の時は、何を使ったら、よいかな」 「もし～がなかったとしたら、どうなるだろうか」
○変換する	「大きさ（長さ・重さ・体積・傾きなど）が変わったら、どうなるかな」
○具象化する	「図を書いて考えてみてはどうかな」
○連想する	「～と似たものにどんなものがあるだろうか」

さらに、2001年にアンダーソンらにより提言された、教育目標を分類し明確に記述する枠組みとしての「ブルーム・タキソノミー」の改訂版にも注目した。改訂版「ブルーム・タキソノミー」では、認知領域として「記憶」「理解」「応用」「分析」「総合」「評価」の6つが挙げられおり、それらを説明する項目も示されている（表3）。これらの認知領域や項目として挙げられた「比較する」「拡張する」等の動詞の文言も、私たちが「思考力」を理解する上で参考とすることができると思った。

〔表3 改訂版ブルーム・タキソノミー〕

Remember	Recognizing 見分ける・認識する	Analyze	Differentiating 違いを見つける	
	Recalling 取り出す(持ち出す)		Organizing 統合・統一する	
Understand	Interpreting 解釈する		Evaluate	Attributing 原因を明らかにする
	Exemplifying 例示する	Checking 照合・確認する、気づく		
	Classifying 分類する	Create	Critiquing 批判・判断する	
	Summarizing まとめる		Generating 生成する	
	Inferring 演繹する		Planning 計画・デザインする	
	Apply	Comparing 比較する	Produce 生産する	
		Explaining 原因と結果を説明する		
		Executing 実行する		
Implementing 具現化する				

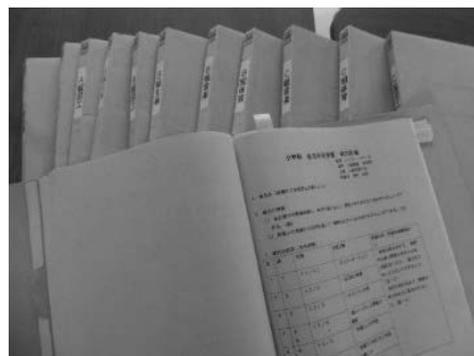
以上のような資料や先行研究を参考として、評価分析シートを作成した(表4)。評価分析シートでは、それぞれの「課題解決のプロセス」で働く「思考」「判断」「表現」を、①から⑯の項目で示した。

評価分析シートを使用し、令和3年度の全単元計画について、個人目標の評価の「思考・判断・表現」の評価の記述が①～⑯のどれに分類されるのか、グループに分かれて検討を行った。その分類の結果から見えてきたことや、考えたこと等をグループ内で意見交換した。

[表4 評価分析シート]

課題解決 プロセス	思考 判断 表現	通 し 番 号	具体的な力	カウント	備考	
課題の 発見	思考	①	関連する情報を検索する			
	判断	②	必要な情報を選択する			
解決方法の 方向性の 計画・決定 と 実行	思考	③	解決に必要な情報を検索する			
		④	解決方法を考える			
		⑤	考えを比較する			
		⑥	結果を予測する			
	判断	⑦	解決の方向性を決める			
		⑧	解決に向けて計画する			
	表現	⑨	考えたことを表現する			
		⑩	計画を実行する			
	結果の 受け止め と	思考	⑪	解決方法を振り返る		
			⑫	他の方法を考える		
⑬			次の課題を発見する			
判断		⑭	結果に基づいて意思決定する			
		⑮	結果を評価する価値付けする			
表現		⑯	結果を表現する			
どれにも当てはまらない						
①から⑯にあてはまらない		記述		備考		
「思考・判断・表現」では ない		備考				

令和3年度、小学部では各学級（2学年ごとの複式学級の計3学級）の生活単元学習、音楽、図画工作、体育で作成し、サーバー上のデータと紙媒体のファイル（図3）で保存した。中学部では、生活単元学習（学年別）、作業学習、国語、数学、音楽、美術、保健体育で、高等部では、生活単元学習、作業学習、国語、数学、職業、音楽、美術、保健体育で作成した（表5）。



〔図3 単元計画ファイル（小学部）〕

〔表5 各学部単元計画ファイル一覧〕

小学部 12冊	生活単元学習	4つの授業についてA組・B組・C組の各学級別
	音楽	
	図画工作	
	体育	
中学部 9冊	生活単元学習	各学年
	作業学習	3作業種で1冊
	国語	縦割り3グループで1冊
	数学	縦割り3グループで1冊
	学部音楽	各1冊
	学部美術	
	学部保健体育	
高等部 8冊	生活単元学習	学部で1冊
	作業学習	4作業種で1冊
	国語	縦割り3グループで1冊
	数学	縦割り3グループで1冊
	職業	2グループで1冊
	学部音楽	各1冊
	学部美術	
	学部保健体育	

分析の対象である単元計画では、児童生徒一人一人に単元の個人目標の設定を行っており、育成を目指す資質・能力の3つの柱を総括して、各教科等別に1つの目標を立てるようになっている。そして、評価の段階において、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別に、単元の中で見ることができた児童生徒の学びの姿を記述している。この、「思考・判断・表現」の評価の記述について分析を行う。

まず、評価分析シートを用いて単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分類した。その結果は、次のとおりである（表6）。

〔表6 単元計画評価の分類結果〕

課題解決プロセス	思考判断表現	通し番号	小学部		中学部		高等部		合計	
			合わせた指導	教科別の指導	合わせた指導	教科別の指導	合わせた指導	教科別の指導		
課題の 発見	思考	①	2	3	14	4	4	0	27	
	判断	②	13	4	15	6	9	19	66	
解決の方向性の決定と 解決方法の計画・実行	思考	③	3	4	12	7	40	20	86	
		④	38	53	42	26	65	49	273	
		⑤	12	7	14	8	19	4	64	
		⑥	0	11	9	18	4	5	47	
	判断	⑦	16	39	32	4	21	8	120	
		⑧	1	5	6	12	20	10	54	
	表現	⑨	69	103	134	59	67	83	515	
		⑩	20	39	63	15	25	38	200	
	結果の受け止めと 振り返り	思考	⑪	0	1	1	3	0	1	6
			⑫	0	6	3	3	18	11	41
⑬			0	0	0	2	0	0	2	
判断		⑭	3	7	6	5	4	19	44	
		⑮	1	6	3	3	0	0	13	
表現		⑯	6	14	11	5	3	11	50	
合計									1608	

今回、集計を行った全目標数は3,281だった。その内「思考・判断・表現」の評価の記述があったものは1,581の48.2パーセントだった。このうち「～たり、～たりすることができた」や